

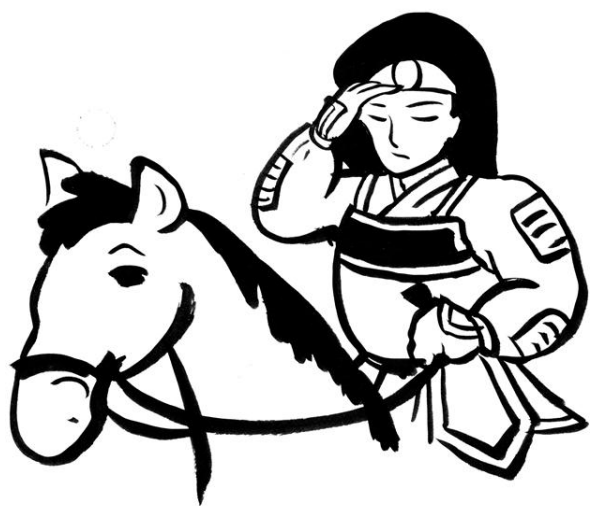
野田の馬洗池の話

豊前市千束の野田、千束交差点をバイパスに沿って少し西に行った所に、「馬洗池」というめずらしい名前の池があつてな。そんな池を「もうらいけ」とか、「もうらいぶち」「もうれえぶち」とか呼ぶ人もおるそうじゃ。周囲四百メートルほどのかなり広い池じゃが、池ができる前まではきれいな川が流れ、深いふちがあつたそうじゃ。そんな馬洗池には、こんな言い伝えがあるんじゃ。

むかし、むかしのことじゃつた。

神功皇后というお人がたくさんの兵隊を連れて、九州に戦にやつて来ておつたんじゃ。皇后様の兵隊はとっても強く、次から次へと戦に勝ち進んでいったそうな。そして、皇后様が豊前をお通りなされた時のことじゃ。

その日は、暑い暑い日でのう。大変な戦と長旅で、皇后様の一行はたいそう疲れておつた。じりじりと照りつける日差しに、目の前の風景がしんきろうのようにゆれ、歩くたびにまいあがる土けむりは、あせにまみれた体にまとわりついた。そしておそいかかるつかれからか、野田を通るころには一行の足取りはさらに重くなり、一歩ふみ出しては休み、一歩ふみ出しては休みし、もう



前に進めないありさまじゃった。馬のつかれも大変なもので、おしても引いても、前にも後ろにも動かんことなつてしもうた。中にはへばりこむ馬もでる始末。

「ああ、いっぱい水が飲みたい……。」「人も馬も同じ気持ちであつたらうのう。

すると何ということか、不思議なこともあるもんじゃ。一行の前に水があふれだしたではないか。一行の前の川は皇后様の前でみるみるきれいな水をたたえ、大きなそして美しいふちを造つたんじゃ。兵隊たちはわが目を疑つたが、それが本物とわかると大きな声を上げ、だき合つて喜んだそうじゃ。

皇后様も大変喜んで、兵隊たちのつかれた体をそのきれいな冷たい水で清められたそうじゃ。そして、つかれきつた馬にも水を飲ませ、みずから、馬の体やひづめを洗いぬいで洗いになったんじゃ。

ところで、近くでその様子を見ていた村んもんは、こん不思議なできごとを目を見張つた。大きなふちが出来たことも不思議じゃが、よく見ると皇后様の一行の辺りだけ、何とも言いようのないやわらかな光がただよい、その光が水面に映え、辺り一面、光と水の不思議な世界をつくつておつたんじゃ。長い間、夢の世界を見ている心地で、村んもんはその様子に見とれておつたそうじゃ。

皇后様が馬を洗つたこん野田んふちの話は村中に伝わつた。一行が去つた後も、このふちはきれいな水をたたえ、辺り一帯の田畑をうるおした。村んもんは、そのふちを「馬



洗淵（もうらいぶち、もうれえぶち）と呼んで大切に生きてきたそう。

江戸時代には、このぶちをせき止めて大きな池を築造したが、かつての馬洗淵にちなんで、馬洗池と名付け、今にいたっていると言います。馬洗池は、今でも、季節に応じて、水草の間に水鳥の群が見られ、戦前は五月下旬の海軍記念日に、この池で泳ぎ初めをする人もいたそうです。

神功皇后とは仲哀天皇のおきさきで、多くの軍勢を率いて、くまそ征討のため九州にやってきたといわれています。仲哀天皇は途中急な病でなくなってしまうますが、その悲しみを乗りこえ、くまそを征討した皇后は海をわたり、新羅（当時、朝鮮半島にあった国）とも戦ったとされます。こうした神功皇后にまつわる言い伝え（神功皇后伝説）は全国各地に残され、京築各地でもいくつかが伝えられています。舟人のおこし掛けの伝説もそうで、日本の国がつくられる中で残された一種の英雄伝説と言えるのではないのでしょうか。

（亀田清美）



馬洗池記念碑